

研究の現場から

道徳科学研究センターの研究動向



新科学モラロジーを提唱した『道徳科学の論文』の中で、廣池千九郎は、「聖人の教訓も、今日の科学的研究の結果も、みなともに真の知識は

「知徳一体」の現代的文脈への応用の試み

道徳科学研究センター社会科学研究室教授

梅田 徹うめだ とおる

真の道徳に一致すべきものであることを認めており、真の知識は必ず道徳を含み、真の道徳は必ず知識の基礎の上に立つものであることを明らかにしております」（二冊目二二五ページ）と書いています。

廣池は、「知徳一体」を最高道徳とほぼ同じ内容を含むものとして理解していましたが、「知徳一体」の理念を最高道徳だけに結び付けておくのは少しもつたいないような気がします。なぜなら、「知徳一体」には現代社会における諸問題にアプローチするのに非常に有用なメッセージが含まれているからです。私たちは「知徳一体」をどうしたら現代的な文脈に応用できるかをもっと検討すべきでしょう。

廣池が展開していた内容を踏まえ、「知徳一体」の理念を現代的な文脈に応用しようとすれば、たとえば、どのような展開ができるのでしょうか。一、二紹介しておきましょう。

廣池は、「人間の利己主義に立脚している」学問に厳しい目を向けてきた。とりわけ、「人間の欲望に存する」「自己利益の経済学」を厳しく批判しました。「経済学が単に人間の欲望を基礎として成立するなど称するごときは現代科学の原理に反する一つの不完全なる臆説おくせつと称すべき」（八冊目四八ページ）と述べています。ところが、経済学の分野では、一九九〇年代以降、行動経済学、実験経済学の研究者らが、現実の人間は常に合理的な選択をするとはかぎらず、ま

た、欲望の充足だけを行動原理とするとはかぎらないことを実験等によって明らかにしてきました。経済学における知と徳との関係の解明にはほど遠い状況ですが、特定の学問分野で、ある種のシフトが起こってきたことは注目に値します。

また、近年、AI（人工知能）が急速に発展し、人間性に対するその影響に人々の関心が集まるようになりました。高度な情報収集・情報処理能力によりAIは、人間が獲得できなかった「神の視点」を獲得できるようになるとも言われています。もっとも、人間であれば誰しも積み上げてきている「世界」の認識がAIにはできません。そこにAIの弱みがあります。それができない以上、AIは人間を凌駕りゅうがすることはないと見方があります。それでも、AIの開発現場では、「人工の道徳的主体」を実装する試みが行われようとしており、開発者たちはそれに取り組むことに価値や意義を見出しているようです。AIが発展するこの時代、「知徳一体」の立場からさまざまな議論ができるのではないのでしょうか。